



N I E 教育実践記録

平成28年度

南九州市立川辺中学校 教諭 徳永 亜美

目次

1	「N I E 教育」実践のきっかけ	2
2	「N I E 教育」実践の記録	3
(1)	新聞の比べ読み	3
(2)	南日本新聞「よむのび教室」	3
(3)	南日本新聞「南風録」の活用	4
(4)	N I E 全国大会大分大会参加	5
(5)	新聞コンクール・南日本新聞「若い目」投稿	6
3	1年間の実践を終えて	7
	参考文献	8

1 N I E 教育実践のきっかけ

N I Eとは「newspaper in education」の略称で「教育に新聞を」という意味をもつ言葉です。もともとは1930年代にアメリカで始まり、日本では約30年前に提唱され、各地で新聞を用いた授業が実践され始めました。2011年には中学校の学習指導要領に謳われるようにもなりました。しかし、まだまだ新聞を利用した授業が定着している、新聞が生徒たちの身近なものとして広まっているとは言い切れません。新聞には多くの情報があふれており、日々更新されます。そして、

そこにつづられる文章は無駄がなく整然としています。この媒体を授業に取り入れることは生徒たちの読む力・書く力・情報を取捨選択する力、そのほか多くの力をつけるきっかけになると考えました。そこからN I E授業実践を始めることとなりました。

これまでの本校での新聞の取り扱いについてですが、昨年度までは南日本新聞と朝日中学生新聞の2紙を図書室に閲覧用として1部ずつ置いていました。生徒たちは主にテレビ欄とプロ野球の結果を閲覧するために利用しているようでした。そのため、毎日のように図書室で新聞を見る生徒でもテレビ欄側を「1面」と勘違いしている生徒や、スポーツ欄以外は見ない生徒がほとんどでした。それに、新聞を手にする生徒はごく少数で、新聞を見ることすらしない生徒のほうが大多数でした。新聞を購読している家庭は4割に満たないということも分かってきました。

毎日新しい情報が掲載され、無駄のない良質の文章と写真がふんだんにちりばめられている新聞を生徒たちにも読んでもらいたい。そのためにはどうすればよいかを考えていた時に新聞で目にしたのが「よむのび教室」でした。「よむのび教室」はN I E教育の出前授業で、南日本新聞社から記者がいらっしゃって文章の書き方や新聞の仕組みなどを教えてくださいました。約2時間の授業でしたが、生徒たちは生き生きと授業に参加し、のちの感想でも「新聞をもっと読んでみたいと思った」「いろいろな人の努力で作られている新聞はすごいと思った。」などと新聞に興味を持った生徒が多くいたことが分かりました。

このことをきっかけに国語科の取組としてN I Eに焦点を当て、新聞を用いた授業づくりに力を入れていくことが決まりました。しかし、ゼロからのスタートでわからないことも多く、何を実践していいのか、実践したことが実際に効果を生むのか不安ばかりでした。そんなときに南日本新聞社からN I E実践指定校の依頼を受け、本校だけではなく、南日本新聞社や他校の先生方とも相談しながらN I Eを実践していく機会を得ました。相談する機会や他校での取組を参観する場を持つことによってこれまでの不安が解消されていきました。

実践を初めてまだ間もない取組ではありますが、今年度の取組を実践記録としてまとめたいと思います。

2 N I E教育実践の記録

(1) 新聞の比べ読み

本校は平成28年度から日本新聞協会よりN I E教育実践指定校を受けました。実践指定校に認定されるとその地域で購読できる新聞をすべて提供してもらえます。本校では南日本新聞、朝日新聞、読売新聞、日本経済新聞、西日本新聞、毎日新聞の6紙を毎日届けられています。

このことにより同じ内容の記事の読み比べができるようになりました。熊本の大地震やオリンピックなど大きな事件が起きたときは授業でも読み比べを取り入れて、物の見方や考え方が文章の書き方や写真のアンクル、記事や見出しの大きさや紙面での位置に表れていることを学習しました。

しかし、授業で取り入れたときだけではなく、日常的にその習慣をつけるきっかけになったのが掲示の方法でした。毎朝、届いた新聞の1面のコピーを廊下に掲示するようにしました。すると、1面に掲載する記事がどの新聞も同じ日もあったり、地域紙ならではの特集があったりすることに生徒たちは気づくようになりました。生徒たちが毎日利用する

場所に掲示したため、自然と日常会話の中にも新聞の話題が出てきたり、生活の記録の日記部分にも新聞に関する話題が登場したりすることが多くなりました。



(2) 南日本新聞「よむのび教室」

前年度3年生に対して実施してもらった読む伸び教室を今年度は1年生を対象に実施してもらいました。テーマとしては前年度と同じく、新聞の作られ方や記事の書き方、文章の組み立て方についてでした。後半はワークショップとして「切り抜き新聞コンテスト」を行いました。

「切り抜き新聞コンテスト」とは一人に一部ずつ新聞を配布して、気になった記事を切り抜き、広幅用紙に張り付け、感想や意見を書き、自分なりの新聞を作成するというものです。今回は5～6人のグループにわかれ、自分たちでテーマを決めて1つの新聞を作り上げました。時間は約40分間と短かったものの、どのグループも個性豊かな新聞を作り上げることができました。記事を取り上げた場所ごとに並べ、世界地図とともに紹介する新聞や、地域スポーツだけを特集した新聞、選んだ記事はバラエティ豊かだけれども、まとめ方を工夫した新聞や、自分たちの感想をSNSのLINEを模した形でまとめた新聞など、発想豊かなものが多く、驚かされました。

一見遊びのようにも見える作業ですが、自分の気に入った記事を見つけ、切り抜くためにはまず記事を読み込まなくてはなりません。読むきっかけはイラストや写真であったとしても、感想を書き、新聞に仕上げるためには記事を読み込むことが必須です。その作業を楽しみながら無意識のうちにできたのは非常に意義のあることだと感じました。自分たちで記事を選んだためか、発表のときもしっかりと説明ができ「聞いてもらいたい」という気持ちがあふれているように感じました。



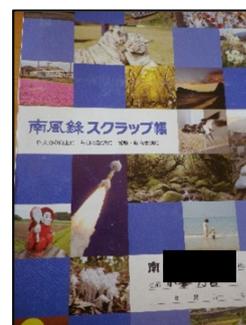
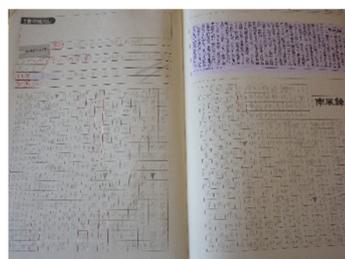
(3) 南日本新聞コラム「南風録」の活用

新聞に興味を持ってもらうための活動はいくつか行ってきましたが、新聞に書いてある文章を深く読む活動はまだ不足しているように感じました。そこで取り入れたのが南日本新聞コラム「南風録」の書き写しです。

南風録書き写し用のノートを全校生徒に購入してもらい週末課題として南風録の書き写しを課しました。コラムは1週間のうちに中学生でも理解しやすいものを教師側が選び、印刷したものを配布し、授業時間に音読をさせ、貼り付けさせました。南風録の中には、教科書では出てこない言葉や表現も多く出てくるので意味調べと感想を書いてくることも課題としました。

はじめのうちは写すだけで精いっぱいだったようですが、回を重ねるごとに余裕が生まれ、辞書にも載っていない新しい言葉や政治用語の略語などはインターネットで調べたり、関連する記事を貼り付けてきたりする生徒も出てくるようになりました。感想の内容も南風録に対する感想だけだったものが、テレビでの情報を取り入れる生徒が出てきたり、自分の意見を明確にできる生徒も出てきたりしました。

音読してから書き写すことで読めない漢字を自覚し、新しい言葉を調べるきっかけとなりました。また、その週にあった出来事が話題となっているため、興味を持ち取り組む意欲となったようです。また、書き写し用のノートは方眼ノートのように一マスずつ区切られているため、一文字でもずれたら、最後が入りきらなくなっています。ほとんどの南風録は1文字も文字の余りがないように作られているので、余計な付け足しや、逆に言葉を飛ばして書き損ねてしまうと最後でマスがちょうど埋まらないということが起きます。そこからも生徒たちはゲーム感覚で一文字も無駄のない文章が作られていることに気が付いたようでした。



(4) N I E 全国大会大分大会参加

8月4日・5日の二日間にわたって、大分県のホルトホール大分でN I Eの全国大会が行われました。NIE 実践指定校になることで、全国大会への参加もできるようになりました。鹿児島県からは小学校・中学校・高校から合わせて7名の先生方と南日本新聞社の記者5名の合計12名で全国大会に参加しました。北海道から沖縄県まで全国各地からあらゆる校種の先生方や新聞記者が一堂に会し、N I E教育の意義について意見を交わしました。

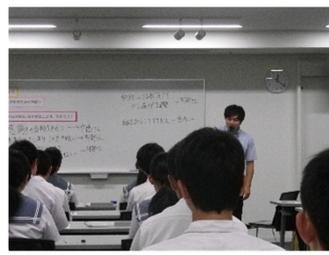
公開授業や実践発表が様々な校種でありましたが、どの学校にも共通していたことは学校全体で組織的にNIE教育を推進する体制を整えていることでした。今回参観した学校では国語や社会はもちろん保健体育、技術家庭、総合的な学習の時間、特別活動、朝活動など多岐にわたってNIE教育の実践がなされていました。各学年にNIE担当が配置されている学校も多くありました。そのため、NIE教育に広がり生まれ、教科や学年を越えて継

続的に系統性をもって取り組むことができていました。NIE 教育の有意義な実践には組織的な取組が欠かせないと感じました。

そして、校内だけではなく、協力してくださる新聞社の方々との連携も欠かせないものだということが分かりました。実際に生徒たちに接して、生徒たちの様子を知る私たちと、新聞の現場を知るプロが力を合わせることで生徒たちにとっても魅力的な授業を作ることができるのだということが分かりました。

研究授業で参観した大分市立判田中学校の特別活動の授業では、新聞を読み、まとめ、発信し、深める作業が流れの中に組み込まれていました。記事をしっかり読み込まなくてはできない内容でした。驚かされたのは生徒の発表姿勢でした。堂々と発表し、他者の意見を認める雰囲気がありました。判田中では日ごろから新聞を題材に使ったスピーチや視写を取り入れているようでした。その中で生徒たちは社会には多様な言論が存在することを知り、他者の意見を尊重する姿勢が培われたのだらうと感じました。

最後に、パネルディスカッションのテーマに「楽しくなければNIE じゃない!」というフレーズが使われていましたが、そのフレーズの説明が印象的でした。楽しむためには「タイムリー」「リアリティー」「成長の実感」の三点が大切だということです。これはNIEのみならず学校教育全般においても同じだと感じました。今回学んだことを日ごろの授業に生かし、組織的にNIE 教育を実践できるよう取組を進めたいと感じる原動力となる力をもらった2日間となりました。

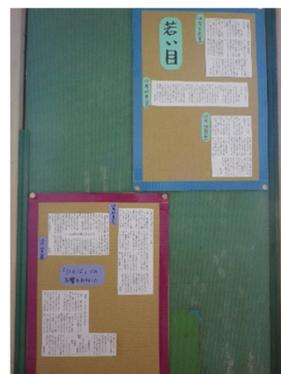
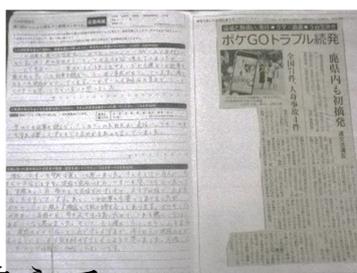


(5) 「いっしょに読もう!新聞コンクール」への参加と南日本新聞「若い目」への投稿

新聞を読み、感想を書く機会の一環として「いっしょに読もう!新聞コンクール」への参加を呼びかけました。内容は新聞を読み、気になる記事を見つけ、感想を書き、家族や友人に記事を読んでもらいその人の意見をまとめ、最後に自分自身の意見や提案・提言を書くというものです。実施期間は夏休みの間として生徒たちに呼びかけました。これまでも自分の好きな記事を読んで感想を書くという作業はしてきましたが、この取組のいいところは一つの記事に対する意見を家族や友人から聞くということです。そのあとで再度自分の意見をまとめる作業があるため、他者の意見によって自分の考えが変化したり、場合によっては自分の考えを補強したりすることがあることに気づくことができます。また、「家族で会話をするきっかけとなった」、「普段仲のいい友人でも正反対の意見を持っていることに気づかされた」という意見もありました。

また、新聞は読むだけではなく、掲載される楽しみもあるという側面から南日本新聞の投稿欄「若い目」に投稿を始めました。授業や週末課題で500字程度の作文を書かせ、添削したものを南日本新聞社に送りました。投稿を始めてから約1か月ですが、3人の生徒の作文が掲載されました。掲載された本人はもちろんですが、クラスメイトや掲載者のご家族や親類の方からも喜びの声があったようで、投稿することや文章を書くことへのモチベーションになっているようです。今後も定期的に投稿を行いたいと思います。





3 1年間の実践を終えて

この1年を振り返り、「この方法でよかったのか」と自問自答し、不安に感じることも多くありましたが、日常会話の中に新聞の話題が出たり、図書室前の新聞コーナーに足を止める生徒の姿を多く見たりすることが出来、私自身もNIE教育に携われたことをありがたく感じました。今年度はNIEを始めたばかりということで迷いも多くありましたが、南日本新聞社、大分合同新聞社などの記者からたくさんのお話を聞く機会があり、いろいろなことを知ることができました。また、NIEを進めていくうえで、どんな取組ができるか、どんな工夫ができるかについて、全国大会に参加したことで取り入れたい活動がたくさん見つかり、とてもいい経験となりました。

しかし、自ら新聞を読もうとする生徒はまだ一部に限られており、記述する文章も大きく変化があったとは言えません。また、全国大会や記者との情報交換の中でヒントを得ながらも実践できていないこともたくさんあります。今後も読む力、書く力の育成のために継続的な指導が大切だと感じました。始めて間もない活動なので目に見えて数値的な成果というものは出てきていません。しかし、今後もNIE教育の重要性を研究し、生徒たちに新聞の有用性を伝えられるよう、研究を重ね実践していくことで、数値的にも向上がわかるように努めていきたいと思えます。

参考文献

鹿児島県NIE実践報告書（鹿児島県NIE推進協議会 2016年2月20日）

第21回NIE全国大会大分大会資料集（大分県NIE推進協議会 2016年8月4日）

学校研究の歩み（大分市立判田中学校 2016年）